

Title	ハイデガーにおける「存在様式」と「真理」の関係について
Sub Title	Zur Beziehung zwischen „Seinsweise“ und „Wahrheit“ bei Heidegger
Author	山崎 諒(Yamazaki, Ryō)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2021
Jtitle	哲學 (Philosophy). No.147 (2021. 3) ,p.17- 40
JaLC DOI	
Abstract	<p>Seit der Kritik von E. Tugendhat hat sich eine Vielzahl von Debatten über die „Wahrheitslehre“ in Sein und Zeit angesammelt. Dieser Artikel behandelt zwar auch den Wahrheitsbegriff bei Heidegger, aber sein Fokus liegt auf einer auf den ersten Blick bescheiden erscheinenden Sache : die Beziehung zwischen „Seinsweise“ oder „Wiesein“ und „Wahrheit“. Die konventionellen Interpretationen von Heideggers Wahrheitslehre legen den Schwerpunkt ausschließlich auf das „Was-sein“ und übersehen das „Wie-sein“. Weil Heidegger oft „Was- und Wie-sein“ als „Sein“ bzw. „Seinsverfassung“ bezeichnet, scheint es jedoch unentbehrlich und entscheidend, beide Perspektiven auch in Bezug auf die Wahrheit einzunehmen. So weist dieser Artikel zunächst auf das Fehlen einer „Wie-Sein“ Perspektive in der betreffenden Debatte hin und beschäftigt sich mit der Frage, inwiefern „Wahrheit“ mit „Wie-Sein“ zusammenhängt. Wir machen zu diesem Zweck die Struktur „So-Wie“ (im Folgenden „SW-Struktur“) zu einem Leitfaden : diese Struktur spielt eine wichtige Rolle in der Kritik von Tugendhat, aber ist sie auch erforderlich, um die Beziehung zwischen „Wie-sein“ und „Wahrheit“ zu untersuchen. Zusammenfassend vertritt dieser Artikel folgende Behauptungen : 1) „Wie-sein“ spielt eine Rolle bei der Entscheidung, welches Seiendes als Richtmaß in der SW-Struktur verwendet werden soll. 2) Heidegger sieht, dass es eine „Nicht-Übereinstimmung“ in verschiedenen „Wie“ gibt – d. h. dass es irgendeine Form von „Unwahrheit“ darin gibt.</p>
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000147-0017

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ハイデガーにおける「存在様式」と 「真理」の関係について

— 山 崎

諒*

Zur Beziehung zwischen „Seinsweise“ und „Wahrheit“ bei Heidegger

Ryo Yamazaki

Seit der Kritik von E. Tugendhat hat sich eine Vielzahl von Debatten über die „Wahrheitslehre“ in *Sein und Zeit* angesammelt. Dieser Artikel behandelt zwar auch den Wahrheitsbegriff bei Heidegger, aber sein Fokus liegt auf einer auf den ersten Blick bescheiden erscheinenden Sache: die Beziehung zwischen „Seinsweise“ oder „Wie-sein“ und „Wahrheit“. Die konventionellen Interpretationen von Heideggers Wahrheitslehre legen den Schwerpunkt ausschließlich auf das „Was-sein“ und übersehen das „Wie-sein“. Weil Heidegger oft „Was- und Wie-sein“ als „Sein“ bzw. „Seinsverfassung“ bezeichnet, scheint es jedoch unentbehrlich und entscheidend, beide Perspektiven auch in Bezug auf die Wahrheit einzunehmen. So weist dieser Artikel zunächst auf das Fehlen einer „Wie-Sein“ Perspektive in der betreffenden Debatte hin und beschäftigt sich mit der Frage, inwiefern „Wahrheit“ mit „Wie-Sein“ zusammenhängt. Wir machen zu diesem Zweck die Struktur „So-Wie“ (im Folgenden „SW-Struktur“) zu einem Leitfaden: diese Struktur spielt eine wichtige Rolle in der Kritik von Tugendhat, aber ist sie auch erforderlich, um die Beziehung zwischen „Wie-sein“ und „Wahrheit“ zu untersuchen.

Zusammenfassend vertritt dieser Artikel folgende Behauptungen:
1) „Wie-sein“ spielt eine Rolle bei der Entscheidung, welches Sei-

* 慶應義塾大学大学院文学研究科哲学・倫理学専攻哲学分野博士課程。

endes als Richtmaß in der SW-Struktur verwendet werden soll. 2) Heidegger sieht, dass es eine „Nicht-Übereinstimmung“ in verschiedenen „Wie“ gibt – d. h. dass es irgendeine Form von „Un-wahrheit“ darin gibt.

はじめに

『存在と時間』における「真理論」をめぐるのは、E・トゥーゲントハットの批判を皮切りにして、多種多様な議論が蓄積されてきた。本稿もまた、『存在と時間』の真理概念をめぐる考察を行うが、しかしその焦点は華々しいこの問題系の主流から見れば実につましく映るかもしれない事柄にかんするものである。それはすなわち、「存在様式 (Seinsweise)」ないし「いかにあるか (Wie-sein)」と「真理 (Wahrheit)」との関連である。本稿を導いているのは、従来の真理論解釈は「何であるか (Was-sein)」という視点に偏りすぎており、「いかにあるか」という視座が欠けてはいないか、という筆者の疑念である。前期ハイデガーが「存在 (Sein)」をしばしば「何で-いかに-あるか (Was- und Wie-sein)」と換言するなどしており、「何であるか」と「いかにあるか」の両輪が欠かすことのできないものだということに鑑みるとき¹⁾、真理にかんしても双方の視点を持つことが重要であると思われる。本稿は、真理論をめぐる議論における「いかにあるか」という視点の不在を指摘し、当該の事柄が「真理」とどのように絡んでいるのかを論じることに注がれる。そして、そのさい本稿が導きの糸とするのは、「そのまま-そのとおり (So-Wie)」という構造である (以下「SW 構造」)。この構造はトゥーゲントハットの批判において重要な役割を果たすものであるが、本稿の見るところ、「いかにあるか」と「真理」との関係を検討するさいにも意義深いものになっているのである。結論として、本稿は当該の関係にかんして以下のような主張をなすものである。1) 「いかにあるか」は、SW 構造においてどのような在り方をした存在者を基準とすればよいかを規定する役割を担っている。2) ハ

ハイデガーは「何であるか」だけでなく、もろもろの「いかにあるか」のあいだにも「不一致」があることを——それゆえ、何某かの形式の「非真理」があることを見てとっている。

さて、本稿の議論はつぎのように進んでいくことになる。まずは第1章で、「何であるか」と「いかにあるか」について簡潔な導入を行っておく。そして第2章では、トゥーゲントハットの批判をもとにしてハイデガーの真理について論じている W・スミスの論稿を瞥見し、そこに「SW 構造は命題的真理に固有である」という前提があることを指摘する (2-1, 2)。そして、そうした前提が維持できないことを『存在と時間』のテキストに沿って示し、SW 構造が種々の「いかにあるか」ないし「存在様式」に一貫して見られる構造であることを指摘する。また、そのうえで、「いかにあるか」というのが、「そのまま-そのとおりの」という指示に従うさいの基準となる存在者の在り方を定めているということを論じる (2-3)。第3章ではさらに、その「いかにあるか」ということにかんしても「不一致」ないし「非真理」を論じることができるということを論じる——この「不一致」ないし「非真理」は、「何であるか」という通常真理論で問題となる事柄にかんする「非真理」（つまり「偽」）とは異なる、特殊な「非真理」なのである。最後に、本稿では十全に論じることのできなかつた点にかんして、簡潔な示唆をなし、締めくくりとすることにす。

1. 「何であるか」と「いかにあるか」

まずは、本稿が重要視している「何であるか」と「いかにあるか」の区別にかんして雑駁に規定を施しておきたい。一般的にはおそらく、「何 (what)」と「いかに (how)」にかんしては、「何 (what)」を恒常的な性質として、「いかに (how)」を偶然的な性質として処理することだろう。しかし、ハイデガーの区分けにおいては、それらはどちらも「何であるか」ないしレアリテートに分類される²⁾。基本的に、「いかにあるか」という

のは「存在はレアルな述語ではない」というときの「存在」がもつ諸相を意味している。それゆえ、「この存在者は眼前存在している」と述べる時、この述語は当の存在者の内実を規定しているわけではなく、まさに存在の仕方について規定しているのである。そして、そういった「存在様式」には、主として「眼前性 (Vorhandenheit)」、 「手許性 (Zuhandenheit)」、 「実存 (Existenz)」 などがあるのである。

これについては、ハイデガーにおける「何であるか」と「いかにあるか」が、性質間の区別というよりも、「エッセンティア」と「エクシステンティア」という伝統的な区別に関係しているということを見るのが有益であるように思われる。たとえば、ハイデガーは1928/29年冬学期講義『哲学入門』(GA 27)において、「本質＝〈何であるか〉＝エッセンティア」、 「特定の種の〈いかにあるか〉＝エクシステンティア」と述べている (GA 27, 274)。また、1927年夏学期講義『現象学の根本諸問題』(GA 24)では、「何であるか」と「いかにあるか」を主題的に取りあつかっているが、当該箇所ではそれが「エッセンティア」と「エクシステンティア」に重ねられているのである (GA 24, 170)。だが、「エクシステンティア」は、哲学史では通常「事実存在 (Daß-sein)」と訳される。だとすれば、どうしてハイデガーはそれを「いかにあるか」と呼ぶのか。それは、ハイデガーは伝統が「エクシステンティア」ということで「眼前性」しか解してこなかったことを批判し、「存在は多様に語られる」というアリストテレスの言葉におうじて、いわば実在性の諸様相を見いだしていたからである——そういった様相こそが、「眼前性」や「手許性」や「実存」という名で呼ばれているのである。そして、ハイデガーはしばしば「何であるか」と「いかにあるか」の統一をあらわす「何で・いかに・あるか (Was- und Wie-sein)」を、端的に「存在」としたり、あるいは「存在体制 (Seinsverfassung)」としていたりする³⁾。それゆえ、『存在と時間』のハイデガーにおける根本的な主題が「存在」であり「存在体制」であるとい

うことが同意されるべきなのだとしたら、そこでは「何であるか」と「いかにあるか」の双方が問題となるということも同意されるべきであろう。それは、「真理論」にかんしても同様であると思われるのである。

2. 「いかにあるか」と「SW 構造」の関係

本章では、「いかにあるか」と「真理」の関係を分析すべく、ハイデガーの真理論をめぐる W・スミスの議論を見ることにしたい。それをつうじて本稿は、(真理論における重要トピックである) SW 構造と「いかにあるか」をめぐって、とある前提がスミスの議論にあるということを指摘する——それはつまり、SW 構造は(「眼前性」という存在様式に対応する)「命題的真理」に固有なものである、という前提である。しかし、本稿の見るところ、『存在と時間』のテキストを見るかぎり、そういった前提は維持することのできないものである。とはいえ、スミスの議論はトゥーゲントハットの批判をもとにしたものであるため、まずは当の批判を簡潔にまとめ、それにかんして本稿が設ける議論上の制限についてもひとこと付言しておくことにしたい。

2-1. トゥーゲントハットによる批判

トゥーゲントハットの批判を端的にあらわせば、ハイデガーが「命題的真理」よりも根源的であるとする「開示性」や「被発見性」を「真理」と呼ぶことには、「いったいどのような正当性と意味があるのか」というものである (Tugendhat (1969/1992), 432)⁴⁾。

ハイデガーは、真理を《知性とモノとの一致 (adaequatio intellectus et rei)》と見なす伝統的な真理観(いわゆる「合致説」)は派生的なものであるとし、そうした命題的な真理の根源に、「発見して在ること (entdeckendsein)」や「被発見性 (Entdecktheit)」としての真理を見いだそうとする。しかしそのさい、(少なくとも)命題的真理にとっては必要不可欠である

「そのまま-そのとおり (So-Wie)」という規範的な構造を不当にも抹消してしまっている、というのがトゥーゲントハットの見立てである。トゥーゲントハットのまとめるところでは、『存在と時間』第44節でのハイデガーは、命題的真理について以下のような段階的な特徴づけを与えている⁵⁾。

- 1) 言明が真となるのは、言明が存在者を「それがそれ自身で存在するまま」, 「そのとおりに」 挙示して発見する場合である。
- 2) 言明が真であるということが意味しているのは、言明が存在者をそれ自身にそくして発見しているということである。
- 3) 言明の真理存在 (真理) は、〈発見して在ること〉として理解されなければならない。

トゥーゲントハットは、ステップ1からステップ2への移行には問題がないと述べる。というのも、ステップ2に含まれる「それ自身にそくして (an ihm selbst)」という表現は、SW 構造を含意しているからである。しかし、ステップ2からステップ3への移行は決定的な問題を抱えている。というのも、そこでは「それ自身にそくして」という表現すら何の説明もないままに抹消されてしまっているからである。そうすると、言明は発見しているということだけで——存在者を「そのまま-そのとおり」発見しているか否かにかかわらず——真だと呼ばれることになってしまうだろう。このことは、どのように正当化されるだろうか。

ここでトゥーゲントハットは「発見 (entdecken)」という表現に着目して、「もし言明が偽であるなら、言明は存在者を発見してはおらず、むしろ存在者を「隠蔽する」のであり、「覆蔵する」ことになる」(Tugendhat (1969/1992), 437) という解釈がとれるなら、ハイデガーによる移行は問題がなくなると考える。その場合、「すでに発見そのもののうちに、発見がほんとうに発見であれば真であらざるをえないということが潜んでい

る」ことになるからである (ebd.)。しかし、そういった解釈をとることは叶わない、というのも、ハイデガーによる「発見」という語の用法は曖昧であり、言明はその真偽にかかわらず「発見している」と云うことができてしまうからである⁶⁾。そうすると、あらゆる言明が真である、という結論に至ってしまう。真偽という規範性ないし二値性から離れてしまったものを「真理」と呼ぶ「意味」と「正当性」など、トゥーゲントハットの見るところ存在しないのである。

以上がトゥーゲントハットの批判のあらましであるが、ここで一点、本稿の議論領域にもかかわる事柄を述べておきたい。田村(2011)も述べるように、トゥーゲントハットの批判にたいするハイデガー側からの応答として典型的なものとしては、ラサルの議論が挙げられるだろう⁷⁾。ラサルは、ハイデガーは当該箇所「命題的真理」を「被発見性」や「開示性」によって置換しているわけではなく、前者の「存在論的な可能性の条件」(Wrathall (1999), 73)として後者が述べられているのだと論じている⁸⁾。こうしたラサルの議論には、一定の正当性がある。ハイデガーは『存在と時間』において、アレーティアの訳語として「真理」として「被発見性」を用いているのだが、その対立概念として幾つかのものを挙げているのである。たとえばハイデガーは、『存在と時間』第7節で「現象の隠蔽性」について以下の三つの意味を区別している⁹⁾。1)「そもそもまだ発見されて^レいない」という意味での「覆蔵性 (Verborgenheit)」、2)「かつて一度は発見されていたものがふたたび隠蔽に陥った」という意味での「埋没性 (Verschüttetheit)」、3)「かつて発見されたものが、ただ仮象としてではあるが見えている」という意味での「立て塞ぎ (Verstellung)」である。さきのラサルによる区別に照らせば、1が「存在論的な可能性の条件」の次元に、3が「命題的真理」の次元に対応するだろう¹⁰⁾。これに鑑みれば、ラサルは「覆蔵性」に対立する「非覆蔵性」としての真理を問題とするため、「立て塞ぎ」を焦点に据えるトゥーゲントハット(ならびにスミ

ス)からの批判は的外れだと考えることになる¹¹⁾。この点で、ラサルとトゥーゲントハットのあいだには、「真理」という表現をめぐっての一種の喰いちがいがあるように思われるのである。

本稿としても、ハイデガーが命題的真理の底にあるものとして「そもそも何か何かが何かとしてあらわれていること」を考えており、それをアレーテイアとしての「真理」と呼んでいることは認めるものである¹²⁾。これ自体は——こう云ってよければ——現象学的な真理論がもつ重要な論点であるのだが、問題なのは、そうした「非覆蔵性」としての真理と「命題的真理」のあいだの関係である。荒畑(2009)の表現を借りるならば、「正当性証明(Ausweisung)」と「基づけ(Fundierung)」を区別することが重要である¹³⁾。つまり、「このペンが赤い」という言明の真偽を問うためには、そもそも「このペンが赤い」ということが——あるいは「このペン」や「赤さ」が——顕わになっていなければならない(「非覆蔵性」)。その意味で、非覆蔵性は命題的真理の基礎にある。しかし、そのような顕れによって当該の言明が正当化されるわけではけっしてない。この件は、ラサルやスミスの議論ではあまり明確化していないように思われるし、ハイデガー自身、「根源-派生」という発想を用いるさいに明瞭に意識していないように思われるのである¹⁴⁾。とはいえ、「いかにあるか」と「真理」との関係というつましい事柄を焦点とする本稿では、この件をめぐり詳細な検討を行わず、結論部で本稿の成果を踏まえた示唆を行うに留めたい。それゆえ、本稿の大部分は、上述の区別で言えば3次元での議論を精密化することに費やされることになる。そこで次節では、トゥーゲントハットの批判をもとにしつつ、当該の関係にかかわるとある前提を置いておきたい。Smith(2007)の議論を具体的に見ていくことにしたい。

2.2. 「SW 構造は命題的真理に固有である」という前提——W・スミスの議論

さて、Smith (2007) は、まずトゥーゲントハットの批判をまとめたうえで、それにたいして批判を加えている代表的な論者の議論を検討し、それらの批判が正鵠を射ていない（それゆえにトゥーゲントハットの批判は依然として決定的なものである）と論じる。そして、トゥーゲントハットの批判をまじめにとったうえで、『存在と時間』の思索のなかにハイデガーを救いだすための議論を模索する。そこで目指されるのは、命題的真理とは別のかたちで開示性としての真理に規範性をとりもどすことである。最終的にスミスは、「本来性 (Eigentlichkeit)」・「非本来性 (Uneigentlichkeit)」という二値性に着目し、それこそが目下の要求を充たすものであるとしている。つまり、スミスは開示性が「たんなる世界の開けなのではなく自己の開けでもある」ことに着目し、「本来性という様態においてのみ現存在は、みずからの世界開示が絶対的なものではなく、何か〔sc.「死」や「不安」〕を締め出してきたのかもしれない」という可能性に気づくと考えるのである (Smith (2007), 175; [] 内は引用者による)¹⁵⁾。

ここで本稿が着目するのは、スミスの議論が「SW 構造は命題的真理に固有である」という前提を置いているように思われることである。実のところ、Smith (2007) においては、SW 構造が「正しさ (Richtigkeit)」としての真理（すなわち命題的真理）と同一視させられ、SW 構造を含まないものとして「本来性」と「非本来性」が挙げられているのである。たとえば、スミスはダールシュトロームを批判しつつ、つぎのように述べている¹⁶⁾。

もしダールシュトロームが、開示性を「根源的な真理」として特徴づけるということを、当の開示性はそれ自身で存在するままにみずからを開示するというを基にして正当化するつもりなのであれば、結局のところ、実際には真理の新しい意味が何か与えられているわけで

はないということになる。むしろ私たちは、命題的な真理の規範が、それを基礎づけているとされていた当の現象そのものへと奇妙にも拡張されているのに会うのである (Smith (2007), 170)。

ここでは、「そのまま-そのとおりの」が「命題的な真理の規範」(つまり「正しさ」と等置され、それが「根源的な真理」へと繰りこされていることが批判されている。裏返せば、スミスにとって「根源的な真理」には「そのまま-そのとおりの」という構造が含まれてはならない、ということになる。そのうえでスミスは、「本来性」と「非本来性」について、「ここで私たちは、正しさという規範からは区別される、現存在の開示性の成否にまつわる一種の尺度を手に行っている」とも述べている (Smith (2007), 175)。それゆえ、スミスはSW 構造と同一視された「命題的真理」の規範性である「正しさ」とは異なる規範性を「開示性」としての真理に求め、その結果としてSW 構造を含まないものとして「本来性」・「非本来性」という二値性を取りだしていることになる。こういったことから窺われるのは、Smith (2007) における議論は、「SW 構造は命題的真理に固有である」というテーゼを前提にしなければ成立しない、ということである。しかし、このテーゼは果たして維持できるものなのだろうか。SW 構造は、言明ないし命題の「正しさ」と覆い合うものなのだろうか¹⁷⁾。

2.3. SW 構造の在処

「SW 構造は命題的真理に固有である」というテーゼは、一見すると真っ当なものに思われる。というのも、SW 構造が表立って導入されるのは『存在と時間』の第44節なのだが、そこでは主として「命題的真理」が取り沙汰されているからである。たとえばハイデガーは、命題を第一次的な場とする《知性とモノとの一致 (adaequatio intellectus et rei)》という伝統的な真理観を分析するなかで、「一致」は「そのまま-そのとおりの」と

いう関係性格をそなえている」と述べている (SZ, 216)。しかしながら、これは、SW 構造をもっているのは命題的真理のみだということの意味するとはかぎらない。あるいは、「認識はそれでも事象を在るがままそのとおりに「与える」べきである」(ebd.)とも云われるが、これも「認識のみがSW 構造をもつと云っているとは限らない。ハイデガーにおいては、「認識」や「言明」といったふるまいは「眼前存在者」に適したものであり、「手許存在者」や「現存在」に適したふるまいはそれとは別ものである。そして、こうしたふるまいの差異は、それぞれが対応している「眼前性」や「手許性」、「実存」といった「いかにあるか」をもとにしたものなのである。では、ハイデガーにおいて、SW 構造が「使用」などに見られないことになるのだろうか¹⁸⁾。

実のところ、SW 構造は手許存在者との交渉においても見られるものである。それが見てとれるのは、『存在と時間』第18節における「適所を得させること (bewenden-lassen)」や「在るがままにすること (sein-lassen)」にまつわる記述である。

〈適所を得させること〉が存在的に意味しているのは、或る事実的な配慮の内部で或る手許存在者を、それがいま存在するまま (wie)、そしてそれにかんしてそう在るまま、そのとおりに (so) 存在させることである (SZ, 84)。

存在的な〈適所を得させること〉は、交渉の相手方となる存在者にたいして変更を加えるのではなく、その存在者を「在るがまま」にしておくことを意味する¹⁹⁾。つまり、道具をスムーズに使用できているなら、その道具はその使用に適しているのであり、またそれと同時に、「在るがままに」存在している——その本領を発揮できているのである。しかもハイデガーはここで、存在的に適所を得させないという、いわば負の値を意味す

るパターンにも触れている²⁰⁾。それはたとえば、目下の仕事にとって手許にある道具が適していない、といった場合であろう。

それゆえ、SW 構造は「手許存在者」へのふるまいにも見られると云える²¹⁾。そして、「手許存在者」には「適」・「不適」という二値性が見られるとも云える。すなわち、「手許存在者」を在るがままに在らしめることができている場合、その手許存在者は（目下の仕事にとって）「適している」ものであり、そうでない場合は「適していない」のである。

しかし、それは現存在が手許存在者を自身の企図へと無理強いしているということでは決してない。ハイデガーの道具分析のなかには、確かに現存在優位の目的論的な性格があるのだが、しかし「在るがままにする (sein-lassen)」というのは、あくまで存在者をそれが存在するままそのとおりに存在させることを意味している²²⁾。この点で、眼前性にそくしたふるまいと手許性にそくしたふるまいのあいだに差異はない。どちらも「そのまま-そのとおりに」という指示にしたがっているのである。この両者のちがいをひとつ挙げれば、当該の指示にしたがうさいの基準点となるもの——すなわち「存在者そのもの」の選定が異なるということがある。誤解を懼れずに云ってしまえば、手許性における「存在者そのもの」は、現存在や他の存在者との関係的な性質の網の目のなかにある存在者であるの にたいして、眼前性におけるそれは、そういった関係から切り離されている——脱世界化されている——存在者なのである²³⁾。それゆえ、手許性と眼前性では、「存在者そのもの」の決定枠組みが変わっているものであり、だからこそ、このふたつの様式の転換は投企の根本的な変容とされるのである²⁴⁾。

では、『存在と時間』に見られるいまひとつの「存在様式」であるところの「実存」にかんしてはどうであろうか。ここにも SW 構造は見られるのだろうか。本稿の見るところでは、やはり「実存」にかんしても SW 構造は存在しているのである。ハイデガーは、『存在と時間』でつぎのよ

うに述べている。

被投性の引きうけが意味しているのは、現存在が、それがそのつどすでに存在していたとおりに本来的に存在する、ということである (das Dasein in dem, *wie es je schon war, eigentlich sein*)。とはいえ、被投性の引きうけが可能になるのはただ、将来的な現存在がそのもっとも固有な「それがそのつどすでに存在した仕方 (*wie es je schon war*)」——つまりその「既在」で在りうる、というふうにしてだけなのである (SZ, 325f.)。

ここでは「先駆的決意性」が、「現存在がそのつどすでに存在していた仕方で」存在することを含むとされている。すなわち、現存在が在ったがままそのとおりに存在することが、「先駆的決意性」には含まれているとされているのである。さらにそこには、「そのとおりに在りうる」という将来方向の動向もそなわっている。それにかんして別の箇所では、「みずからが存在するとおりに存在しうるために (um sein zu können, wie es ist)」(SZ, 364) といった表現も用いられている。それはつまり、「先駆的決意性」というのは、「死すべきもの」であるというみずからの既在的な在り方のおりに、「死すべきもの」として将来的に投企する、ということであろう。そして、ハイデガーはそういった事態のことを指して、「実存の真理」と呼ぶのである²⁵⁾。それゆえ、「実存」にかんしても同様にSW構造が見てとれると云える。そしてその場合には、「本来性」と「非本来性」が——じぶんが在ったがままに在りうるかということに応じて——二値としてあらわれてくるのである²⁶⁾。

それゆえ、以上のことからつぎのように述べることができるように思われる。すなわち、「SW構造は命題的真理に固有なものである」というテーゼは誤っている。SW構造は、「手許性」・「眼前性」・「実存」のすべて（に

対応するふるまい)に見られる構造であり、しかも、そこではそれぞれの「存在様式」ないし「いかにあるか」に応じて二値が見てとれるのである。つまり、「手許性」には「適/不適」,「眼前性」には(狭義での)「真/偽」,そして「実存」には「本来性/非本来性」といった具合である。それゆえ、Smith (2007)の議論についても、本稿としては異論を呈することになる。本稿の分析によれば、「実存」にかんしてもSW構造が見られるならば、すくなくともSmith (2007)が求めているようなかたちでは結論が得られないはずである。

そして、それぞれの存在様式におうじて(ひろい意味で)「真」や「偽」と呼べる二値が存在していると云えるとき、「いかにあるか」ないし存在様式との関係について、つぎのように云えると思われる。存在者にたいするふるまいは、存在者をそれが存在するまゝそのとおりに「与える」という指示に服しうるものであり、そのさい、「いかなる在り方をした存在者を基準とすべきなのか」ということにかんして、存在様式ないし「いかにあるか」が規定的な立ち位置を占めている。さしあたり、そのような仕方では「いかにあるか」は「真理」に——そしてSW構造に——関係していると云えるだろう。そのうえで、本稿では「いかにあるか」と「真理」にかんして、さらなる関係性を指摘することにしたい。それは、そうしたさまざまな「いかにあるか」のあいだで「一致」や「不一致」が起こりうる、ということである。云いかえれば、「何であるか」について誤りうるだけでなく、「いかにあるか」について何らかの意味で「誤る」ということがありうるのである。

3. 「いかにあるか」の「不一致」について

「いかにあるか」にかんして何らかの意味で「誤り」という云いかたができるかどうかにかんしては、1928/29年冬学期講義『哲学入門』(GA 27)でのつぎの記述が重要な示唆を与えてくれる。

たとえば生物は、延長した物体としては、特定の数学的な規定可能性を認めるが、こうした可能性を無際限に実現していけば、有機体をそのものとして把握・規定するという目的を逸することになるだろう。それゆえ、認識の厳密性というのは、認識されるべき対象にかんしてまさに不適切だということがありうるのである。対象が要求してくるものとのこうした不適切性、こういった不一致は、基礎的な形式の非真理なのである (GA 27, 43 f.)²⁷⁾。

まず確認すべきなのは、ここで云われているのが、第一次的には存在者の「何であるか」にかんする不一致ではないということである。というのも、「生物」を「延長した実体」として記述することは、内容記述として「偽」であるわけではないからである（それゆえ、ハイデガーも「偽」ではなく「不適切」という云いかたをしている）。むしろここでは、存在者の「いかにあるか」にかんする「不一致」が問題となっていると云える。この例は「生」という存在様式をもつ存在者（生物）を、「眼前性」のなかで捉えようすることの「不適切」ないし「不一致」を扱っているものだと考えられるのである。それゆえ、ハイデガーは「いかにあるか」ないし「存在様式」のあいだにも（「一致」や）「不一致」があると考えており、しかもそれを「基礎的な形式の非真理」だと考えているのである。

こうした「非真理」が「偽」という意味でないという上述の点には留意すべきである。私のまえにある「ペン」について、「これは書くためのものである」という手許性にそくした記述と、「これは金属で出来ている」という眼前性にそくした記述があったとき、「ペン」が「手許存在者」であるとすれば、後者の記述は上述の意味で「非真理」であり「不一致」だということになるだろう²⁸⁾。だが、だからといって、「これは金属で出来ている」という記述が偽になるわけではない。それは依然として「ペン」という存在者にかんする真なる記述なのである。他方で、ハイデガーの道

具分析をいくらかでも受容するひとであれば、そういった記述は正しくないとも感じるだろう。ハイデガーが道具分析で試みていたのは、すべてを「眼前性」のなかで解釈しようとする伝統に抗して、「手許性」という新たなカテゴリーを確立することではなかったか。こういった事例は、たとえば「実存」という存在様式についても見いだすことができる——「人間にかんするこうした定義〔sc. ゴーオン・ロゴン・エコ〕は、後代になってアニマル・ラチオナーレ、つまり「理性的動物」という意味で解釈されたが、こうした解釈は確かに「偽」ではないものの、現存在にかんする当の定義の由来となった現象的な地盤を隠蔽してしまっている（verdeckt）」（SZ, 165;〔 〕内は引用者による）。このとき隠蔽されているのも、第一次的には、存在者の「何であるか」というよりは「いかにあるか」であるだろう。「いかにあるか」というのは、（発見の対概念となる）隠蔽の対象になるものなのである²⁹⁾。このことは、ハイデガーの以下の発言から窺うことができる。

注視（Hin-sicht）によつて、そして注視にたいして、手許存在者は手許存在者としては覆われてしまう。このようにして手許性を隠蔽するような（verdeckenden）眼前性の発見の内部では、出遭われる眼前存在者はその〈しかじかに眼前存在すること〉にかんして規定されるのである（SZ, 158）。

それゆえ、「いかにあるか」の喰いちがいが「不一致」・「非真理」と数えられており、先に見た『存在と時間』第44節で云われていたように、「一致」という関係が〈そのまま-そのとおり〉という性格をもつのだとしたら、存在者とのふるまいにかんする「そのまま-そのとおり」という指示の射程には、「何であるか」という通常の真理論で問題となる事柄だけでなく、「いかにあるか」という事柄まで含まれていると云える。また、

ここからはやはり、存在者の「何であるか」の適切性を定めるには、「いかにあるか」という審級が必要となるということが窺われる。先の例でいえば、「生物」にかんしてどのような内容記述をすれば適切であるのかということは、「生物」は、本来的には「生」という存在様式をもつのであって「眼前性」という存在様式をもつのではない、という了解が必要となる。この意味で、「いかにあるか」の不一致は「基礎的な形式の非真理」と云えるのである。そして、そのようにして「存在様式」を明確化していくことは、他ならぬ現象学的存在論が担う仕事なのである。

おわりに

本稿では、ハイデガーの真理論をめぐって、「いかにあるか」と「真理」とがいかに関係するのかについて分析を試みた。本稿はまず、W・スミスの議論に含まれる「SW 構造は命題的真理に固有である」という前提を、『存在と時間』のテキストにそくして解体し、そのうえで、SW 構造がもろもろの「いかにあるか」に共通する構造であることを示した。そして、「いかにあるか」というのは、そのSW 構造においてどのような在り方をした存在者を基準とすればよいのかを規定する役割を担っている、ということ論じたのだった。そして、それを踏まえ本稿では、ハイデガーは「何であるか」だけでなく、もろもろの「いかにあるか」のあいだにも「不一致」があることを——それゆえ、何某かの形式の「非真理」があることを見てとっている、ということ指摘した。このことによって、ハイデガーの真理論の射程には、「何であるか」ということだけでなく、「いかにあるか」ということもまた重要な仕方で含まれているということが示されたように思われる。

とはいえ、2-1で述べたように、本稿の議論は二値性が見てとれる次元での話にかぎられていた。そこで最後に、二値性が見られない「非覆蔵性」や「被発見性」、「開示性」としての「真理」にかんして、本稿の成果

(の一部) をもちいていかなることを云いうるのかを示唆することで締めくくりをしたい。関係するのは、SW 構造はどこまで維持されているのか、ということである。当該の意味での「真理」——というより「アレーティア」——としてハイデガーが考えているのは、命題的真理の底にあるものとしての「そもそも何かは何かとしてあらわれていること」である。たとえば、「このペン¹は赤い」という命題が真ないし偽であるためには、そもそも当該の事態が顕わになっていなければならない——もっと云ってしまえば、「ペン」が「ペン」として、「赤さ」が「赤さ」として顕わになっていなければならないのである。ハイデガーの見るところ、こうした「端的に受けとること」には「偽」の可能性がない³⁰⁾。こうした次元にかんしては、SW 構造は適用されないように思われる。しかし、視点を変えたときには、或る意味でのSW 構造がそこに見てとれる可能性がある。ポイントは、通常のSW 構造が「存在者」と「存在者」にかんする関係だということである。つまり、ハイデガーの真理論もその影響下にあると思いきフッサールの術語をつかえば、「空虚志向」で志向されている「存在者」と「充実志向」で志向されている「存在者」が一致するということが、そこでの焦点になっているのである。しかし、ハイデガーにおいては、その前段階として、「存在」と「存在者」の関係を考えることができる。ハイデガーの考えでは、「存在者は先行的な存在了解なしにはどうやってもアクセス可能にはならない」のである (GA 25, 55)。それゆえ、「ペン」が「ペン」として与えられるためには、それに先立って「ペン」の存在が顕わになっていなければならない³¹⁾。そしてそれは、先行的に存在が開示されているまま、そのとおりに存在者が発見されている、という一種の——しかしきわめて特殊な——SW 構造を暗示しているように思われる³²⁾。とはいえ、本稿では(紙幅の都合と筆者の能力のゆえに)それを十全に展開することができないため、この点にかんしては今後の課題とすることにしたい。

注

- 1) Vgl. GA 9, 131; GA 27, 184; GA 61, 18.
- 2) Vgl. GA 24, 57 f. なお、ハイデガーは一般的な区別に見られるような本質的な性質と偶有的な性質との差異を、(狭義の)「何であるか」と「しかじかにあるか (So-sein)」というかたちで、「何であるか」の内部でつづけている (GA 29/30, 180 f.).
- 3) Vgl. GA 9, 131; GA 27, 184; GA 61, 18.
- 4) トゥーゲントハットの批判としてもっともよく知られるのは1970年の記念碑的著作『フッサールとハイデガーにおける真理概念 (*Der Wahrheitsbegriff bei Husserl und Heidegger*)』であるが、スミスが依拠しているのは1964年に行われ、上記著作のもとになった講演「ハイデガーの真理の理念 (Heideggers Idee von Wahrheit)」である。基本線にかんして両論稿のあいだに差異はないため、本稿でも後者をもとにして議論をまとめることにする。
- 5) Vgl. Tugendhat (1969/1992), 435 f.; SZ, 218.
- 6) Vgl. ebd. 428; SZ, 222.
- 7) なお、トゥーゲントハットの批判に賛同するものとしては、たとえば Lafont (1994) や Smith (2007) がおり、反対するものとしては、Gethmann (1993) や Wrathall (1999) がいる。
- 8) なお、スミスはこれにたいして、トゥーゲントハットはそういった可能性の条件というポイントは承知しており、そのうえで、当の可能性の条件を「真理」と呼ぶことの意味と正当性を問うているのだ、と批判している (vgl. Smith (2007), 164).
- 9) Vgl. SZ, 36.
- 10) 後者にかんして本稿は、この次元が「命題的真理」に限られないことを示す。それゆえ、「二値性」が観てとれる次元というふうと呼んだ方が適切ではあろう。
- 11) Vgl. Wrathall (2011), 34 ff.
- 12) スミスの指摘するとおり、トゥーゲントハットもこうした次元があることは認めるだろう (vgl. Smith (2007), 164)。トゥーゲントハットがなお批判するのは、そういった(正当化という枠組みから外れる)次元を「真理」と呼ぶことの是非である。ここでラサルは、「真理」というのはあくまで「アレーテア」ないし「非覆蔵性」の意味で用いられているのだ、と応答するだろう。とはいえ、おそらく、一定の理路を経れば、正当化されざるこの次元を「真理」と呼ぶことは可能であろう (vgl. 荒畑 (2009), Kap. 6)。

- 13) Vgl. 荒畑 (2009), 303.
- 14) Vgl. 荒畑 (2009), Kap. 6.
- 15) なお、こうしたスミスの議論について、Wrathall (2011) はつぎのように批判している——「しかしもちろん、成功条件ないし失敗条件をそなえているものがすべて真理と呼ばれる権利をもっているわけではない。[...] 権利論証の支持者がそうする義務を持ちながら私たちにけっして与えてこなかったのは、真理と呼ばれるに値する類の規範性についての説明である」(Wrathall (2011), 37 f.).
- 16) スミスの見るところ、ダールシュトロームは、世界はいついかなる場合でもみずからを〈そのまま-そのとおり〉開示するのだ、と述べることで、そこに規範性を回復させようとしている。スミスはここに不徹底を見てとっているのである (Smith (2007), 168 ff.).
- 17) なお、スミスは「命題的真理」がもつ規範性を根拠づけるために、それとは別種の——スミスの考えではSW構造を含まない——規範性をもちだそうとしているわけだが、かりに本稿が問題にしているテーゼが維持できたのだとして、そもそもそれが有望な手立てであるのかどうかには疑問の余地がある。スミスは「命題的真理」が「本来性」・「非本来性」という規範性にもとづく述べるが、その具体相にかんしては判然としていない。ここで問題となるのは、現存在が本来的であるか非本来的であるかという（とりわけ現存在の自己理解に重きが置かれた）区別が、どうして存在者にかんして言明された内容の真偽にかかわるのか、ということである。「このペンは～」といった命題の真偽が、それをなす現存在が本来的であるか否かに依存するというのは、簡単には想像しがたい事態である。スミスは「世界」の開示が「自己」の開示でもあるということをつぎにして議論しているが、問題なのは、まさにその両者の結びつきをどう説明するのかということだと思われる。
- 18) ハイデガーは「一致」という発想そのものを棄却していると云われるかもしれないが (vgl. SZ, 33, 219), Wrathall (1999) が述べるように、ハイデガーは「表象と事物との一致」という存在論的に定かではない理論を批判しているのであって、「一致」という概念そのものを手放しているのではない (vgl. Wrathall (1999), 74 ff.).
- 19) なお、ここで「適所を得させること」と共に触れられている「在るがままにすること」は、『存在と時間』以降のテキストにおいて論究され、とくに1930年の『真理の本質について』(GA 9所収)ではまさに「真理」との関係において語られているのである。なお、『存在と時間』でのハイデガーは、「存在論的な」〈適所を得させること〉を「在るがままにすること (Sein-

lassen)」に結びつけ、存在的な適所の有無にかかわらず、「あらゆる手許存在者を手許存在者として明けわたすこと」(SZ, 85)にかかわっているといた。つまり、『存在と時間』のハイデガーにおいては、そもそも存在者は手許存在者として出遭われる、という枠組みが取られているのである。だが、これ以降「在るがままにすること」が主題となっていくさいには、そういった手許存在者特権主義は薄くなっていく。

- 20) Vgl. SZ, 84.
- 21) ゲートマンはSW 構造を命題的真理に閉じこめているわけではない——「そのさい明らかになるのは、「一致」ないし「〈そのまま-そのとおり〉関係」が、ここで関係してくる真理モデルの双方〔sc.「命題的真理モデル」と「操作的真理モデル」〕において何らかの役割を果たしている〔…〕ということである」(Gethmann, 1993, 156;〔 〕内は引用者による)。本稿はSW 構造へのこうした着目は重視するものの、ゲートマンがとっている「命題的真理」を「道具の真理」や「実存の真理」に還元するという方針には賛同しない。なお、後述するとおり、本稿はSW 構造の適用範囲をさらに実存にまでひろめるものである。
- 22) Vgl. 荒畑 (2009), 38; 松本 (2014), 59.
- 23) Vgl. SZ, 69, 75, 158.
- 24) Vgl. SZ, § 69. なお、第 69 節でつぎのように述べられていることは示唆的である——「数学的な自然科学においては、その主題となる存在者が、存在者が唯一発見されうる、そういう仕方で発見される (in ihr das thematische Seiende so entdeckt ist, wie Seiendes einzig entdeckt werden kann).〔…〕主導的な存在了解を根本概念から仕上げることによって、方法の手引き、概念的構成の構造、それらに属している真理〔!〕と確実性の可能性〔…〕が決定される」(SZ, 362 f.;〔 〕内は引用者による)。
- 25) Vgl. SZ, 307 f.
- 26) 本稿がこうした云いかたをするさい、現存在の「本来性」と「非本来性」にかんして何かしら道徳的な善し悪しを見てとっているわけではない。現存在は事実に「死へとかかわる存在」なのである。本稿が論じているのは、あくまでも現存在にかんしても何かしらの二値が見られうる (一定の基準で区別される) ということに尽きる。
- 27) Vgl. auch GA 27, 83.
- 28) これにかんして「存在者」自体が異なるのではないか、という異論があがるかもしれないが、ハイデガーにおいて手許性と眼前性を存在者のドメイン内での数的な区別と見ることは、手放しでは難しいことである。「道具事物

(Zeugding)」などをめぐるハイデガーの発言は、そういった困難を示していると思われる (vgl. SZ, 73).

- 29) トゥーゲントハットは「発見 (Entdecken)」という言葉の曖昧さを指摘していたが、その対概念である「隠蔽」にもさまざまな意味がそなわっている。すでに触れたように、ハイデガーは、『存在と時間』第7節で「現象の隠蔽性」について以下の三つの意味を区別している。1) 「覆蔵性 (Verborgenheit)」, 2) 「埋没性 (Verschüttetheit)」, 3) 「立て塞ぎ (Verstellung)」である (vgl. SZ, 36)。トゥーゲントハットは、「偽なる言明も発見する」ということをハイデガーから引用しつつ述べるが、その箇所は「ひと (das Man)」による「立て塞ぎ (Verstelltheit)」や「閉鎖 (Verschlossenheit)」について触れている箇所である (vgl. Tugendhat (1969/1992), 438; SZ, 222)。だが、私たちの言明がさしあたりたいい誤っているということは確からしいことではない。むしろそれは、ここで云う「埋没性」という意味での「隠蔽性」であるように見える。というのも、ハイデガーは「空談」について語るさい、「再発見 (Wiederentdecken)」という云いかたをしているからである (SZ, 169)。もっとも、ハイデガーは第44節などで「仮象」というさしあたり「立て塞ぎ」と紐づけられていた「隠蔽」について語ってはいるし、トゥーゲントハットが想定する意味での「偽なる言明」の「発見」について語ることはなお可能であろう。
- 30) Vgl. SZ, 33.
- 31) たとえばゲートマンは手許存在者の発見に先立つ世界の開示を「空虚志向」と重ねて論じている (Gethmann (1993), 165)。しかし、そこでのタイムラグがどういった時間性において語られているのか、判然としていないように思われる。というのも、「何のために」の予期として世界開示を捉えてしまうと、そこでは依然として通俗的な時間概念がベースになっているように読めてしまうからである。もっとも、こうした不明瞭さは『存在と時間』の道具分析そのものに胚胎しているようにも見える。
- 32) 通常のSW構造は通常の「志向-充実」関係をベースにするが、そこでの「時間」は「通俗的な時間概念」で測られるだろう。それにたいして、こうした特殊なSW構造においては、そういった時間概念で見れば、先行的な存在の開示とそれにつづく存在者の発見のあいだにタイムラグは生じない。しかし、ハイデガーはそういった状況のなかに、「時間性 (Zeitlichkeit)」を用いてズレを生じさせているように思われる。

文献リスト

M・ハイデガーの著作

慣例にのっとり、『存在と時間』については略号 SZ の後に頁数を、『ハイデガー全集』（*Gesamtausgabe*）については略号 GA の後に巻号と頁数を記す（とくに挙げることはしていないが、適宜邦訳も参照した——ただし、論文中に記載してある訳は試訳である）。

- ・SZ: *Sein und Zeit*, 19. Aufl., Frankfurt a. M.: Max Niemeyer, 2006.
- ・*Gesamtausgabe*, Frankfurt a. M.: Vittorio Klostermann, 1975 ff.
GA 9: *Wegmarken*, hrsg. v. F.-W. von Herrmann, 1976.
GA 17: *Einführung in die phänomenologische Forschung*, hrsg. v. F.-W. von Herrmann, 1994.
GA 18: *Grundbegriffe der aristotelischen Philosophie*, hrsg. v. M. Michalski, 2002.
GA 24: *Die Grundprobleme der Phänomenologie*, hrsg. v. F.-W. von Herrmann, 1975.
GA 25: *Phänomenologische Intepretation von Kants Kritik der reinen Vernunft*, hrsg. v. I. Görland, 1977.
GA 27: *Einleitung in die Philosophie*, hrsg. v. O. Saame und I. Saame-Spiegel, 1996.
GA 29/30: *Die Grundbegriffe der Metaphysik. Welt-Endlichkeit-Einsamkeit*, hrsg. v. F.-W. von Herrmann, 1983.
GA 61: *Phänomenologische Interpretation zu Aristoteles. Einführung in die phänomenologische Forschung*, hrsg. v. W. Bröcker und K. Bröcker-Oltmanns, 1985.

その他の著作・論文

著者の姓の後に丸括弧内で刊行年を記し、その後に頁数を記載してある。

- ・荒畑靖宏 (2009): 『世界内存在の解釈学——ハイデガー「心の哲学」と「言語哲学」』, 春風社.
- ・田村未希 (2011): 「前期ハイデガーにおける真理論の射程」, 東京大学哲学研究室『論集』, 146-159 ページ.
- ・松本直樹 (2014): 「世界・他者・自己——『存在と時間』II」, 秋富克哉・安部浩・古庄真敬・森一郎編『ハイデガー読本』, 法政大学出版局, 57-67 ページ.
- ・Gethmann, Carl F. (1993): *Dasein: Erkennen und Handeln. Heidegger im phänomenologischen Kontext*, Berlin: Walter de Gruyter.

ハイデガーにおける「存在様式」と「真理」の関係について

- Lafont, Cristina (1994): *Sprache und Welterschließung: zur linguistischen Wende der Hermeneutik Heideggers*, Frankfurt a. M.: Suhrkamp.
- Smith, William H. (2007): “Why Tugendhat’s Critique of Heidegger’s Concept of Truth Remains a Critical Problem”, *Inquiry* (50; 2), pp. 156-179.
- Tugendhat, Ernst (1969/1992): “Heideggers Idee von Wahrheit”, in: G. Skirbekk (hrsg.), *Wahrheitstheorien: Eine Auswahl aus den Diskussionen über Wahrheit im 20. Jahrhundert*, Frankfurt a. M.: Suhrkamp, 1992, S. 431-448.
- Wrathall, Mark A. (1999): “Heidegger and Truth as Corresponding”, *International Journal of Philosophical Studies* (7; 1), pp. 69-88.
- ——— (2011): *Heidegger and Unconcealment: Truth, Language, and History*, Cambridge: Cambridge University Press.